

歴史探訪 Part II - ⑫

江戸川木材工業株式会社

顧問 清水 太郎

日本古代史を私が学んでいる大学では、新しいビルが工事中ですが、教授によりますと、中古期に建てられた出雲大社とほぼ同じ高さ(10丈、48m)でありました。48mの建物を支える為には直径3mの柱が必要ですが、そのような丸太は入手困難でした。発掘調査の結果、直径135cmの丸太を3本金帯で結束して作られていたことが判明しました。出雲は当時人口10万の大都市でありました。古事記は712年、日本書紀は720年に完成しましたが、ほぼ同時代に政府から約60あった国ごとに風土記を編纂するよう命令が出されました。ところが今残っているのは、常陸、出雲、豊後、播磨、肥前のみで、うち出雲国風土記のみがほぼ完全な形で残っている唯一のものとして注目されております。

1984年、出雲にある^{かんぼこうじんだに}神庭荒神谷遺跡から358本の中細型の銅剣と、銅鐸、銅矛が発掘されました。近接する神原神社古墳からは、景初3年(239)銘のある銅鏡が発掘されており、神庭荒神谷遺跡から出土した青銅器の量は日本中に衝撃を与えました。

出雲に関わる神話は数多くあり、因幡の白兎で知られる^{おおくにぬし}大黒主の『国引き神話』「大きな袋を肩にかけ大黒様がきかかると……」と童謡にもうたわれております。

古代史は多くの謎に包まれており、邪馬台国論争、日本のシュリーマンと云われた相沢忠洋氏が解き明かした群馬県の岩宿でみつけた旧石器など、ロマンも感じる世界であります。

日本近世史について

江戸時代の初頭、日本は世界でも有数な金銀採掘量を誇っておりましたが、長崎貿易によって輸入品の量と額に比例して金銀が流出し枯渇して参りました。

1715年、新井白石の進言によって輸出の制限が実施されました。(海舶互市新例)

然るに人の生活が豊かになって増えた輸入品を国産化する政策を図りました。そのうちの一つ砂糖の原料である甘蔗の栽培が奨励されました。薩摩奄美地方で生産されていた黒砂糖を全国に広めたのは川崎領河原の名主を務めていた池上太郎左衛門でありました。明和5年(1768)、苗字帯刀を許されて池上幸豊と名乗るようになりました。幸豊はずば抜けた実行力と身分を超えた広い人脈を持っておりました。

田村藍水は医業を生業としながらも本草学者として知られておりました。元文2年(1737)20才のとき、將軍吉宗から朝鮮人参の実を拝領し、繁殖に取り組んでおります。朝鮮人参の第一人者として知られ、「人参先生」とも呼ばれておりました。幸豊は藍水、その弟子平賀源内や文化人として著名な太田南畝とも交際がありました。

その後幸豊は新田開発事業に傾注しました。発達の原点は古事記にある記述でありました。

「イザナギノ命、イザナミノ命男女2柱の神は、ドロドロと漂っている混沌状態を固めよと命じられ、天の沼矛(ヌボコ)という矛でかきまわしてしずくをしたたり落として島となし国造りの拠点を得た」この神話にヒントを得て、東京湾を埋め立て陸地化し、農地を拓き、食糧の増産に寄与しようとした。この発想が幕府の墾田之法政策を推進するパワーとなりました。現代で云えば「日本列島改造論」を掲げ

て登場した田中角栄を彷彿させます。

地誌学について

最近東海地方の産業について学びました。この地域は、20年以上前に東海道五十三次を歩き、その後東海道ネットワークの会でほとんどの宿場を探訪しましたので楽しく、懐しく学ぶことが出来ました。

愛知県の内陸地は綿花の生産地でありました。綿織物等の繊維工業が栄え、自動織機を発明した豊田佐吉翁がその技術を土台に自動車生産を始め、豊田翁は自治体の名となり、世界のトヨタとなりました。

愛知県南部にある渥美半島では夜になると多くの温室が照明で明るくなっている光景が見られます。夜も電灯を照らすことで菊の花の開花を遅らせ(電照栽培)出荷時期を調整しています。

岡崎は家康が生まれた岡崎城があることで知られております。昔習った小唄に「五万石でも岡崎様はお城下まで船が着く」と云う一節がありました。矢作川の舟運で物資を運び、矢作川流域の大豆を発酵させ、城から八丁(800m)にある醸造所で味噌を生産し、八丁味噌として知られ500年の伝統を誇ります。

信長、秀吉、家康と同じ地域で3人の天下人を輩出しましたが、3人の活力源は味噌であったと唱える食文化史研究者もおります。

浜松の楽器生産は天竜川の上流から運ばれて来る良質な木材を原料としています。浜松出身の本田宗一郎氏はオートバイから自動車飛行機まで生産する世界的な企業を育てました。

その他三ヶ日のみかん、富士市の製紙業、牧之原の茶生産は明治になって失職した武士の失業対策として始まり、斜面の茶畑では茶を霜の害から守るため、風を送る防霜ファンが車窓から見られます。

9月22日、軽井沢のログハウスに泊まり、最後の夏を惜しんで参りました。安曇野から長男が来て、小諸の懐古園に案内してもらいました。島崎藤村が「小諸なる古城のほとり…」と吟じた城址は、昨年からの大河ドラマ『真田丸』の余韻が未だ続いており賑わって参りました。慶長16(1600)年、9月15日、家康率いる東軍と石田三成率いる西軍が激突しましたが、第二次上田合戦に向かう秀忠が率いる38,000の軍勢は、小諸城二の丸に陣を敷き、北国街道を西進し、真田昌幸、幸村が守る上田城を5倍の勢力で攻略しましたが、手こずって落とせず、関ヶ原合戦に遅参してしまいました。馬籠宿の要職の家に生まれ育った明治の文豪藤村はここで何を想ったのでしょうか。

